

戯曲 マッド・ティーパーティー

『不思議の国のアリス』より



原作 ルイス・キャロル

翻訳・脚色 佐藤正明

■登場人物

アリス

チエシヤ猫

三月兔

帽子屋

眠り鼠

序幕

アリス…(チェシヤ猫が木の枝に座っているのを見つけてびっくりし、おずおずと話しかける) チェシヤ猫さん。教えて欲しいの。わたしどつちの道に行ったらいいのかしら。

チェシヤ猫…それはひたすら、きみがどこに行きたいかによるな。

アリス…どこでもいいんだけど――

チェシヤ猫…それなら、どの道を行こうとかまやしないさ。

アリス…――どこかに行き着ければいいの。

チェシヤ猫…そうだな。ただどんどん歩いていけば、必ずどこかにたどり着くさ。

アリス…このあたりにはどんな人が住んでいるの？

チェシヤ猫…(右前足を振って) こつちのほうには帽子屋が住んでいる。

(左前足を振って) こつちのほうには三月兔が住んでいる。好きなほうを訪ねればいいさ。ふたりとも変なやつだけどな。

アリス…でも、変な方^{かた}のところには行きたくないわ。

チェシヤ猫…そいつは無理というものだ。ここではみんな変なやつなのさ。俺も変。きみも変。

アリス…どうしてわたしが変だと分かるの？

チェシヤ猫…そうに決まってるさ。でなけりや、こんな場所に来たりしなかったさ。

アリス…(納得できないという顔で) それじゃあ、ご自分が変だと、どうして分かるの？

チェシヤ猫…まず第一に、イヌは変じゃない。それは認めるな？

アリス…そう思うわ。

チェシヤ猫…そして、イヌは怒ると唸^{うな}り、よろこぶとしっぽを振るな。いつぼう、おれはよろこぶと唸り、怒るとしっぽを振る。ゆえに俺は変だ。

アリス…唸るんじゃなくて、喉をごろごろ鳴らすって言うのよ。

チェシヤ猫…好きなように言うといいさ。じゃあな。(そう言って、姿を消す)



第一幕

三月兎の家の前の木の下にテーブルがあり、三月兎と帽子屋がそこでお茶を飲んでいる。眠り鼠がふたりのあいだに座ってぐっすり眠っている。ふたりは眠り鼠をクッション代わりにして、自分のひじをつき、頭越しに話をしている。大きなテーブルだが、三人はすみに固まって座っている。アリスがテーブルに近づく。

アリス…(小声で) 眠り鼠さんにしてみれば、とても不愉快よね。でも、

眠っているから気にしてないかも。

三月兎と帽子屋…アリスがやって来たのを目にして、声をそろえて大声

で「席はないよ！ 席はないよ！」

アリス…(憤慨して) いっぱい空いてるじゃない！

(アリスはテーブルの片端の大きな肘掛け椅子に腰をおろす。)

三月兎…(好意的な口調で) ワインはどうかね！

アリス…(テーブルを見回して) ワインなんて見当たらないけど。

三月兎…ワインはないんだ。

アリス…(腹立たしそうに) ないのに勧めるなんて失礼だわ。

三月兎…招かれていないのに腰をおろすほうが失礼だよ。

アリス…あなたのテーブルだって知らなかったんですもの。三人よりず

っとおおぜいが座れるようになってるじゃない。

帽子屋…(さきほどからずっと興味深げにアリスのほうを見ていたが、は

じめて口を開く) きみ、髪を切ったほうがいいね。

アリス…(厳しい口調で) 個人的なことをとやかく言うべきじゃないわ。

失礼よ。

帽子屋…(アリスの発言に目をむくが、反論はせず) ワタリガラスが書き物机に似ているのはな—ぜだ？

アリス…(小声で) あら、こんどは面白いことをやろうっていうのね！

謎々遊びならきつと楽しいわ。(ふたりに向かって) それ分かるような気がする。

三月兎…答えが見つかると思うっていう意味かい？

アリス…そうよ。

三月兎…それなら意味していることを言わなくちや。

アリス…(すぐさま答えて) 言ってるわ。少なくとも—少なくとも、わたしと言ってるのはそういう意味なのよ—同じことでしょ。

帽子屋…ちつとも同じことじゃない。そいつは、「食べるものが見える」

は「見えるものを食べる」と同じだと言うようなものさ！

三月兎…手にはいるものが好き」は「好きなものが手にはいる」と同じだと言うようなものさ！

眠り鼠…(寝ぼけながら) 「眠るときに息している」は「息しているときに眠る」と同じだと言うようなものさ！

帽子屋…(眠り鼠に向かつて) おまえの場合は同じことさ。

(そこで会話はとぎれ、一同じつと座っている)

アリス…(小声でつぶやきながら考えるそぶりをする) ワタリガラス？ 書き物机？

帽子屋…(沈黙を破って) 今日は何日だ？ (アリスのほうを向く。ポケ

ットから時計を取り出して、それを不安そうに見つめる。ときどき振って、耳にあてる)

アリス…(ちよつと考えてから) 四日よ。

帽子屋…(ため息をつきながら)二日も狂ってる！(三月兎のほうを向いて、腹立たしそうに)言っただろ！バターを塗ったって直りやしないって。

三月兎…(おずおずと)最高級のバターだったんだけどなあ。

帽子屋…(不満そうに)そうだろうさ。だけど、パン屑まで入れちまったんだ。パン切りナイフなんかで塗るからいけないんだ。

三月兎…(時計を帽子屋の手から取って、憂鬱そうに眺める。それを自分のカップのお茶に浸けて、引き上げてから、もう一度見つめる。言い訳がましく)最高級のバターだったんだよ。

アリス…(三月兎の肩越しに、おもしろそうにそれを眺めていたが)おかしい時計ね！今日が何日かは指すのに、今が何時かは指さないなんて！

三月兎…(つぶやくように)なんでそれがおかしいんだ。きみの時計は、いまが何年かを指すのか？

アリス…(すぐに答えて)いいえ、指さないわ。でもそれは、長い時間ずっと同じ年のままだからよ。

帽子屋…(わしの時計の場合が、まさにその通りなんだ。

アリス…(困惑して、丁寧な)何を言っているのか分からないわ。

帽子屋…眠り鼠のやつ、また眠ってる。(眠り鼠の鼻にポットのお茶を少しかける)

眠り鼠…(不快げに頭を振って、目を閉じたまま言う)そうそう、ぼくもそれを言いたかったんだ。

帽子屋…(またアリスのほうを向いて)謎々は解けたかい？

アリス…お手上げだわ。答えはなあに。

帽子屋…(頭を振りながら)さっぱり分からないよ。

三月兎…(うなずきながら)ぼくもさ。

アリス…(あきれたようにため息をついて)答えのない謎々なんか出すより、ほかにましな時間の使い方があつてしょ。

帽子屋…(わしと同じくらい時間のことを知っていたら、ましな時間なんて言いはしないだろうさ。

アリス…意味が分からないわ。

帽子屋…(ばかにするように顎をあげて)そりゃ分からないだろうさ。きみはたぶん、時間びつたりに喋ったこともないだろう。

アリス…(用心深く)ないわね、おそらく。でも音楽を習っているときは、手でびつたり拍子を打たなければいけないことは分かっているわ。

帽子屋…ああ！そういうわけか。時間さんは打たれるのが我慢ならぬのさ。そう、彼とうまくやってさえいれば、好きな時間にしてくれるよ。たとえば、朝の九時で、ちょうど勉強が始まる時間だとしてどうか。きみが小声で時間さんにそつとお願いするだけで、時計の針があつというまに回ってくれる！一時半になって、昼ごはんさ！

三月兎…(小声でひとりごとを言う)そうなつてくれたらなあ。

アリス…それはすてきでしょうね、確かに。(考え深げに)だけど——その時間では、おながが空いているはずないわね。

帽子屋…最初はそうだろう、ひよつとしたらなあ。だけど、きみの好きなだけ、ずっと一時半にしておけるんだぜ。

アリス…あなたもそうやってるの？

帽子屋…(悲しそうに頭を振って)わしはだめなんだ！この前の三月に時間さんとけんかしてしまったのさ——(ティースプーンで三月兎を指しながら)あいつがおかしくなるちよつと前だった。ハートの

女王主催の大音楽会でのことだ。わしは歌わなければならなかった。
〔きらきら星〕の節で歌う』『ピーラリピラリとコウモリちゃん！

／いったい何をしているの！』この歌はたぶん知っているだろ？

アリス…似ているのは聞いたことあるわ。

帽子屋…続きはこうだ——（歌う）『はるか頭上を飛び回り／お空に浮かぶ盆のよう／ピーラリピラリ——』

眠り鼠…（からだを震わせると、眠りながら歌い出す）『ピーラリピラリ、ピーラリピラリ（繰り返し返す）』（帽子屋と三月兎が眠り鼠をつねって歌うのをやめさせる）

帽子屋…それで、一番を歌い終わらないうちに、女王さまが大声で言ったんだ『こやつ、拍子が狂っていて、いまにも時間の息の根をとめてしまいうではないか！ 首をはねておしまい！』

アリス…（大声で）なんて残酷なの！

帽子屋…（悲しげに）それ以来、時間さんは頼みごとを聞いてくれなくなつたのさ！ だからいつも六時なんだ。

アリス…（やつと分かったという表情をして）だからお茶の用意がたくさんしてあるのね？

帽子屋…（ため息をつきながら）そうなんだ。いつもお茶の時間なんで、食器を洗うひまがないのさ。

アリス…だから、ずつとテーブルを回っているわけね？

帽子屋…その通り。食器を使いおわたらな。

アリス…でも、元にもどってきたら、どうするの？

三月兎…（あくびをしながら、話に割って入る）話題を変えようか。その話題に飽きてきたよ。このお嬢さんに何か話してもらおう。

アリス…（話が振られたことに驚いて）お話しすることなんてないわ。

三月兎と帽子屋…（声をそろえて）それなら眠り鼠にやらせよう！ 起きろ、眠り鼠！（ふたりで両側から同時に眠り鼠をつねる）

眠り鼠…（ゆっくり目をあけて、弱々しいしわがれ声で）寝てなんていなかったよ。きみたちの言っていたことはぜんぶ聞いていたよ。

三月兎…何か話をしてくれ。

アリス…（頼み込むように）どうかお願いします。

帽子屋…早くやつてくれ。でないと、話し終わる前に、おまえはまた寝ちまう。

眠り鼠…（急いで話しはじめる）むかしむかし、小さな三姉妹がいました。名前はエルシー、レイシー、ティリー。三人は井戸の底に住んでいました——

アリス…（興味深そうに）その子たちはなにを食べて生きていたの？

眠り鼠…（少し考えてから）糖蜜で生きていました。

アリス…そんなわけないわ。ぐあいが悪くなってしまうもの。

眠り鼠…その通り。とてもぐあいが悪かつたのさ。

アリス…（ちよつと混乱した表情をしてから）でも、その子たちはどうして井戸の底なんかに住んでいたの？

三月兎…（アリスに向かって熱心に）もつとお茶はどうかね。

アリス…（むつとした口調で）まだなにも頂いていないわ。だからもつとなんてありえない。

帽子屋…もつと少なくともありえないということかな。ないものより多くするのは簡単だろ。

アリス…あなたの意見など聞いてないわ。

帽子屋…（勝ち誇ったように）今度は個人的なことをとやかく言っているのは誰かな？

アリス…(それに対する答えが見つけれなかったので、お茶とバター付きパンを自分でとって食べると、ヤマネのほうを向いて) その子たちはどうして井戸の底なんかに住んでいたの？

眠り鼠…(少し考えてから) そこは糖蜜井戸だったのさ。

アリス…(腹立たしそうに) そんなものないわ！

帽子屋と三月兎…(アリスの発言を制して) しっ！ しっ！

眠り鼠…(むつとして) おとなしくできないんだったら、きみが話のかたをつけたらどうだい。

アリス…(すまなそうに) むりよ。どうぞ続けて！ もうじやましないから。そういうのもあるかもね。

眠り鼠…(憤慨して) そういうのがちゃんとあるんだ！ (話を続けて)

そして、この小さな三人の姉妹たちはね——ドローイングの勉強をしていたのさ。

アリス…なにをドローしてたの？

眠り鼠…(間を置かず) 糖蜜さ。

帽子屋…(話に割って入る) きれいなカップにしたい。みんな席を替えよう。

帽子屋はそう言いながら移動し、眠り鼠がそのあとに続く。三月兎は眠り鼠のいた席に動く。それでアリスはしかたなく三月兎の席に移る。この席替えで得をしたのは帽子屋だけだった。アリスのほうは、三月兎が前の席でミルク入れをひっくり返していたので、前よりずっと悪くなった。

アリス…(眠り鼠をまた怒らせないよう気をつけながら) でも分からない

んだけど、どこから糖蜜をドローしたの？

帽子屋…水は水の井戸からだろう。だから糖蜜は糖蜜井戸からに決まっているだろう？ おバカさん。

アリス…(帽子屋の発言を無視し、眠り鼠に向かって) でも井戸のなか深くにいたのよね。

眠り鼠…そうだよ。その子たちがいるのは、真底深くで移動はなかなかかなわなかったけど、三人はいと仲良くて、そこではなかなか体のぐあい良かったのさ。

アリス…(この答えで頭がこんがらがって、無言になる) ——

眠り鼠…(眠そうにあくびをして、目をこすりながら) 三人はドローイングの勉強をしていたんだ。何でもドローした——Mで始まるものであれば——

アリス…なんでMなの。

三月兎…別に、Mでいいだろ。

アリス…——

眠り鼠…(もう目を閉じていて、こっくりこっくり居眠りしていたが、帽子屋につねられて、短くきやつと叫んでまた目を覚ますと、話を続ける)——Mで始まるものであれば、たとえばマウストラップとか、ムーンとか、メモリーとか、まるつきりとか——「まるつきり同じ」って言うだろ——まるつきりの絵なんて見たことあるかい？

アリス…あら、今度はわたしに聞いているの。(まごついて) あるとは思わないけど——

帽子屋…それなら、喋るな。

無作法に耐えられなくなったアリスは、うんざりして席を立ち、テーブルから離れた。アリスは、彼らが呼び戻してくれることを期待して何度か振り返ったが、眠り鼠はすぐに眠り込んでしまい、あとのふたりはアリスの立ち去ったことにまったく注意を払っていないかった。最後に彼らを見たとき、帽子屋と三月兔は眠り鼠をティーポットの中に押し込もうとしているところだった。

アリス…(森の道を歩きながら)とにかく、あんなところもう二度と行くもんですか！　これまで出たことのある中でいちばんおバカなティーパーティーだわ！



